

## 御申じょう（ごしんじょう）療法（4）

ほんの 200 年前、西ヨーロッパでは産業革命が起き、物事を理論的に考えようとする機運が高まりました。同時に医学も近代的思考を取り入れて徐々に発展し、その西洋医学がいまや世界の主流となっているといっても言い過ぎではありません。確かに、抗生物質や癌に対する化学療法など多岐に亘る薬物や補液、腎不全に対する透析療法など、おおよそ 40 年前からのものですが、過去では考えられなかったものですし、また、目覚しいのが病気の現状を診断する画像診断学でしょう。内視鏡、超音波、CT、MRI など 30 年～40 年前に実際に臨床に使われた時には、びっくりしましたが、その後の進歩はまさに革命



といってもいいほどでした。また、病気の治療法も様変わりしました。放射線やレーザー、電磁波を取り入れた手術法や内視鏡を使った手術方法などは、この 10 年の進歩といってもいいと思います。医師たちがこれに取り込まれていくのは当然であり、また、これらのことを学ばなければ、今の医療ではまったく通用しないのも確かです。そうして、日本を始め先進国では、現代医学がどこでも当然であって、それしかないと思われるようになっていきます。一方、その発達した分だけデータ中心となり、患者さん自身を直接観察しない、言い換えれば、問診（話や訴えを聴く）に始まって視診（観て診断する）、触診（触って診断する）、聴診（色々な音を聴いて診断する）など、本来の基本をおろそかにする傾向も懸念されます。

ところが、67 億 5000 万人（国連；2008 年度世界人口予想＝2008.10.13 発表）の世界人口の内、実際にいまの近代医学の恩恵を受けていると推定される人口は、先進国の 12 億人と発展途上国のなかの富裕層である 4～5 億人の合わせておおよそ 17～18 億人(30%弱)なのです。残った 70%強の人々は、相変わらず、呪術や古くからそれぞれの地方に伝わった医療を受けています。因みに、5000 年前から古代エジプトでは、呪術に加えて薬草学が発達していて、ハーブなどはギリシャ、ローマを通じてヨーロッパの医療にも影響を与えましたが、今でもその地方には残っていますし、古代インド・インダス文明のアーユル・ヴェーダ（生命学）や 3000 年の歴史の中国漢方は今でもアジアを中心に大きな影響を与えています。それぞれの地方では、そのまま受け継がれています。非常に興味深いこれらの医学をここでは詳しくは語りません。結局、世界人口のうちの 70%49 億人の人々は、いわゆる現代医学とは無縁の世界に生きて暮らしていて、古代からの医学や呪術の中で生きています。確かに劣悪な気候に発生する風土病に加え、一般の感染症対策の遅れ、環境衛生のひどさの意味から、彼らは決して長寿とはいえません。しかし、現代医学にはない人間の目で人の全身を観察し、ちょっとした変化に対して対処しようとしています。特に中国の

漢方は痛みに対しても独特のものを持っており、針による鎮痛や有名な針麻酔、種々の漢方薬もあり、ものによっては大変な効果をあげています。しかし、彼らなりの理論もあるのはありますが、究極のところ肝心の“痛み”の原因はわかっていないのです。経験と観察によるものといわざるを得ません。

それでは現代医学では“痛み”に対してどうかといいますと、これまた非常に曖昧なつてきます。60兆個の細胞から成りたっている人間の身体は、その一つ一つがお互いに向き合ったり、手をつないだりして生命体を維持しています。どれとって不必要な細胞なんてないのです。とても全ての細胞が解明されているわけではありません。解明されていない方がはるかに多いのです。特に、痛みに関していえば、表皮に存在する無数の痛点の役割ばかりでなく、深部に発生する慢性の痛みなど、細胞のどこの繋がりに障害がおき、それを痛みとしてどのように伝達され、結果、どのように脳で感じているのか全くわかっていないのです。“痛み”の科学的な解析は、今後の最大の課題であり、もしもこの解析が終了したら、“痛み”の医学は本当の科学になったとっていいと思います。しかし、いくら原因がわからないとってても、現実に数え切れない“痛み”に苦しんでいる人がいる以上、何とか治療しなければいけません。われわれ医師は今、どんなことをしているかといえ、薬物療法が主です。硬膜外ブロックや薬物による脊髄の一部破壊や切除などありますが、結局のところあまり効果は発揮していないのが現状です。

### 痛みに対する“御申じょう療法”

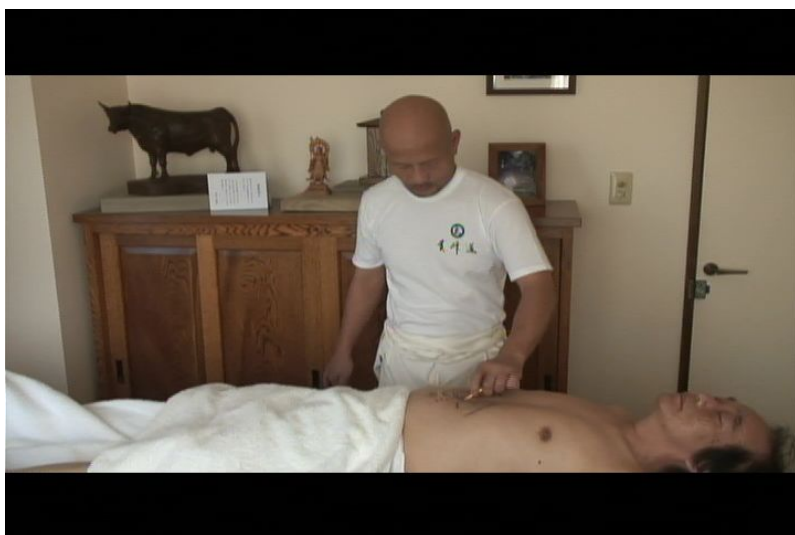
原因のわからぬ堪らないほどの慢性疼痛に対する効果は、他の治療法に比べて“御申じょう”療法は、断然群を抜いています。実際に、治療しておられる現場で、癌のいわゆる末期の患者さんを含めて色々な患者さんを定期的に観察してみましたし、お話もお聞きしましたが、どうして痛みが取れるのかということが判断は出来ませんでした。とにかく患者さんは一応に、身体が軽くなったといわれ、全く奇跡だと喜んで次々に帰っていかれます。医師としてもただ呆然と見送るということになります。治療法は、2本の鍛え抜かれた純金の延べ棒を使って、頭の先から手足の先端までくまなく擦りながら押しつける療法なのです。



貴田晞照師の治療を見学しますと、所々でピタットとまり、ぐいぐいと押しつけていきます。そのポイントに至ると貴田師にも自分を通して気電気が流れるのが分かるといいます。1時間以上かけて身体中をくまなく押しつけ擦ってもらううちに、必ず、身体が軽くなったという印象を話します。実に驚くべきことです。

一般的に病的な組織と正常組織には電位差があるらしいとか、温度差があることは分かっていますが、それが体内や脳に伝達する経路で、どこにどのように作用するかということにはわかっていません。それが免疫細胞の働きや、制癌剤などを受けつけなくしているバリアーになったり、痛みの原因になったりしているという

説もあり、スウェーデンでは、正常な組織と癌組織との間の電位差を測定して、治療に応用できるかどうかの研究が始まっていますが、まだ結論は出ていません。しかし何かがあるはずだから痛むのはたしかなことです。“御申じょう”で、電位差の潜んでいる部位を擦りながらそのポイントを見つけて、異常を感じたところで強く押し付けるのですが、貴田晞照師はこれこそ“邪気”であると表現します。原因が電磁波であれ、電氣的な蓄積であれ、この呼び方はこの“御申じょう”療法を確立した貴田師に敬意を払い、“邪気”と呼ぶべきでしょう。この“御申じょう療法”は、もちろん貴田晞照師が始めました。貴田師は、元々、鍼灸を中心とした東洋医学を治めていましたが、それにあきたらず、この御申じょう療法を考え出し、たくさんの人に治療を施しながら、また年に何度も修験道の聖地・奈良の大峰山にこもって修



行も続けています。修験道とか、“邪気”・・・などと話すと、もうそれだけで新興宗教に入れてしまう傾向があります。随分、新興宗教と間違われたようですが、1日に何人もの痛みを悩める人に対して淡々と治療し、治していつているうちに、現代医学ではどうにもコントロールのできない患者さんが集まり始めました。エビデンスは確かにまだ乏しいのですが、子供さんの激しいアトピーなどは親が連れて行った時、やり方を習って親御さん自身が自分で治療するのですが、不思議に2~3か月でどんどん治っていくのです。正に驚異であるといわざるを得ません。疼痛を取り去ることに対して、疼痛外来で行っている治療と余りにも差があるために、1、2の大病院の麻酔科や研究施設が、研究をはじめたばかりですが、未知のものに対して、また、自分たちの力では不可能なことに対して、成果を挙げているときには、それがいかに民間施設から発したものであっても、われわれ医師は本当に謙虚に学ぶ必要があります。

#### 症例7 31歳、女性（主婦） 帯状疱疹後神経痛

平成19年1月、右臀部から腰部にかけて帯状疱疹を発症。局所と胸部に放散する激しい痛みがあり、2月と3月に入院治療。ステロイド、薬物全て効果なし。リスクがあるため硬膜外ブロックはしなかった。平成20年8月になって、さらに疼痛は激しくなり、仰向けに眠

れない。内服薬を投与されるも効果なし。

平成 20 年 8 月 20 日より、“御申じょう”療法開始。27 日、9 月 4 日、11 日、10 月 2 日、23 日大体一週間に一度、計 6 回施行。第 1 回目には、施術後 30 分間痛みから解放された。2 回、3 回と進むうちに、次第に痛まない時間が長くなり、5 回目終了で、ほぼ疼痛は無くなり、6 回目にて夜も眠れるようになり、全く痛みがなくなり治療終了。その後は、訴えがない。

症例 8 41 歳、男性 ハント症候群 (ハント症候群・水痘帯状疱疹ウイルス(水ぼうそう)をおこすウイルスが、耳(耳介)や耳の中、口の中に水疱(みずぶくれ)や痂皮(かさぶた)が生じさせ、顔面神経麻痺に加えて、激しい耳痛、咽頭痛、頸部痛、頭痛を伴い、帯状疱疹がよくなってからも痛みが続く病気のこと)

平成 11 年 3 月、左顔面神経麻痺を発症。ハント症候群と診断され入院。2 週間のステロイド療法で麻痺は軽快。しかし、激しい頭痛と左三叉神経痛は残存した。その後の 8 年間、星状神経ブロックを 1000 回以上施行も、1 日 10 回、針で刺すような疼痛が持続した。頭部 CT、MRI、異常なし。

平成 20 年 2 月、電撃療法。5 月断食療法を受けたが、軽快せず。

平成 20 年 6 月 8 日、“御申じょう”療法開始。第 1 回目で疼痛は左顔面の一点から何十ヶ所に分かれた感じ。連続 5 回施行。その後、疼痛が全くなり、治癒。